（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　東口　豊

本論文は、Th. W. アドルノの「自然」概念の意味を彼の美学理論に即して明らかにしようとする試みである。

第 1 章「アドルノにおける『自然』概念」では、アドルノがルカーチの「第二の自然」観とベンヤミンの「アレゴリー」論を継承しつつ、「『自然史』の理念」をとおして自然と歴史との弁証法的な把握を可能にしたことを明らかにする。

第 2 章「芸術の概念」は、アドルノが、「徹底的に人為的に構成」されたものとしての芸術は常に「自己の起源」を否定し「新たなもの」を目指す、というモダニズム的な立場をとっていることを明らかにした上で、このモダニズム的芸術観が同時に社会に対する芸術の批判的認識への洞察を可能にするメカニズムに着目する。芸術の自己否定的な動きが、現実の社会を否定しつつ、現実の彼岸にある幸福を間接的に約束する、というアドルノの芸術論の構造を筆者は丹念に再構成する。

第 3 章「合理性の中のミメーシス」および第 4 章「哲学における同一性と非同一性」は、一見すると対極的にあると思われる「自然」と「芸術」とを関連づけるアドルノの独自な概念「ミメーシス」に検討を加える。「同一性」によって支配された合理的世界においては、芸術こそがその「ミメーシス的認識」をとおして合理性を批判しうるが、芸術の示す認識は哲学による「解釈」をとおしてはじめて露わなものとなる、という芸術と哲学の相互連関が筆者によって強調される。

以上の考察を踏まえて、第 5 章「自然と芸術の類似性と差異」において筆者は、アドルノによるシューベルト、ヴェーベルン、ヘルダーリンの作品の哲学的解釈を取り上げつつ、芸術は沈黙する自然を語らせる、というアドルノのテーゼを検討し、「自然」をその思考の原点とするアドルノの哲学が「芸術」を一つの焦点とすることの必然性を示す。

筆者はアドルノのテクストを内在的に解釈する手法をとるために、思想史的文脈におけるアドルノの位置づけ（たとえばアドルノと彼が批判的に継承するヘーゲルとの関係）や、あるいは歴史研究の対象とするにはなおも現代の理論家であるアドルノの現代的意義について十分に踏み込むことがなく、この点が惜しまれる。しかし、アドルノの独自な「自然」概念を「自然史」「第二の自然」「技術（人為）」「ミメーシス」「非同一的なもの」といった彼のその他の基本概念との関連において解明し、それらの〈星座的布置〉をとおしてアドルノの美学思想の特徴を浮き彫りにした点において、本稿は従来のアドルノ理解を前進させるものであり、また〈芸術哲学〉から〈自然の美学〉へと展開しつつある現代の美学的課題にも大きく寄与しうるものでもある。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値すると判断する。